

魅力再発見！仙境あふれる蛇笏賞俳人【相生垣瓜人の世界】

～恭賀新年 本年もよろしくお願いいたします～



「何となく、今年はいい事あるごとし。元日の朝、晴れて風なし。」まさに石川啄木の境地。穏やかで暖かなお正月でした。今年の干支「丁酉（ひのととり）」は、習い事などで結果が得られたり、学問・商売などで成果が得られる年だそうです。是非、様々な事を取り込み、実りある一年にしたいものです。ここ、浜松文芸館でも、伝統を大切にしながらも新たな分野を拓いていく年にしたいと思います。まずは、昨年12月4日より開催中の相生垣瓜人展を多くの皆様に楽しんでいただけますように。今回は、瓜人翁のご遺族の方から色紙や軸、写真等をお借りし展示しました。未公開の作品が多

数並んでいます。瓜人翁が孫誕生を祝って贈った俳句俳画の

数々。推敲に推敲を重ねて完成に至るまでの句作の足跡。自然の中に身を置きながら句作にふける瓜人翁の姿。そこには、父として祖父として生きた日々があり、瓜人翁のまた違った面が垣間見られるような気がします。実は、蛇笏賞や馬酔木賞を受賞した偉大なる俳人、相生垣瓜人ですが、意外と私たちの身近なところに

おられる俳人もあります。某書店の本のカバーは瓜人翁「読書の楽しみを詠む」を自らデザイン化したものです。どうぞ、手にとってご覧になってください。そして、浜松文芸館の展示を堪能していただきたいと思います。 **★直虎4部作 各一冊 100円好評販売中**



館長のひとり言・・・今年の抱負

昨年末、ひょんなことから浜松文芸館の職員として、俳句の一つでも、と思い立ち、一句詠んでみました。「行く秋や 右に傾く 道しるべ」恐れ多くも披露したところ、周囲の反応は「う～ん」でした。その俳句の背景にあるものや我が心中を一生懸命説明したのですが、それではだめなのですね。納得です。言葉で表現するという日常の当たり前の行為の中で、いざ思いを形にするととなると、句にしる歌にしるなかなか難しいものです。浜松文芸館の講座を受講なさる皆様に改めて敬意を表します。というわけで、今年の年賀状には、自作の句はどうてい無理ですので、瓜人翁の一句をお借りしました。「春来る 童子の群れて 来る如く」情景や作者の気持ちが伝わってくるようです。心がほんわかしてきました。何しろ、日記は三日坊主に終わるし文章を書くのは大の苦手ときている私です。こんな私にできることは、鑑賞するということでしょうか。まずは、その視点で俳句や短歌にかかわっていきたいと思います。

湖郷の詩人清水みのる 7 ストライキ事件と父の死

浜松文芸館講演会講師 和久田雅之

みのるにとって好成績での浜中入学と、一年三学期の数学試験で表彰されたことは、「浜中時代最高の佳き」出来事だったが、このことから両親の期待を一身に受けるようになり、それが重圧となって彼は優等生の道を一転、大きく外れていくのである。

三年生になった頃、放課後近くの広沢町の普濟寺に四、五人の仲間と集まり、自作を持ち寄って批評しあったり、生かじりだった生田春月の詩集からハイネを識り、霞がかつたたそがれの中で、春月の「感傷の春」を朗読したり等、文学に傾倒していった。

在学時の校長は、ストライキ撲滅を志して赴任した佐藤礼云校長だったが、浜中名物のストライキは相変わらずで、みのるの二、三年次も時々行われていた。関心の薄かったみのるだったが、まもなく彼もストライキの渦中に呑み込まれていく。

或る日、柔道部員の主だった者は上級生の指令で道場横の通用門から、稽古着を着て佐鳴湖畔の小藪という舟着場まで行き、ここで何やら大声を上げてこのストの主旨を訴えるリーダーたちの態度を見せつけられ、私は内心いささか腹立たしい抵抗を感じていたことも忘れられない。

また同級生の中には、このストを「浜中の行事」と呼んで嘲笑していた者もかなりいたことを思い併せて、意図する目的も明確でなかったそんな連中の後に従いて、なぜ行動を共にしたのかと悔いられる私だった。（「道草少年の記」）

小藪は、家康の正室築山御前が殺害されたところで、近くの西部医療センターの駐車場の片隅に血に汚れた太刀を洗った遺跡がある。浜中から歩いて25分ほどの地である。

数日後、ストライキの首謀者は放校、みのるら文学少年グループは謹慎処分を受けた。「父は怒り母悲しみ、嫁いでいた姉たち二人は軽蔑しきってしまった」という。みのるにはこの処分は過酷に思えたようだ。これをきっかけに、浜中への全幅の信頼感がやや薄れてしまったようだ。しかし、上級学校進学への意欲はかえって強くなり、後年当時の自分を「愛おしく」思うほど勉学に励んだという。

みのるのこうした熱心な勉強ぶりを知らず、父米造は脳溢血が再発してあっけなく他界してしまった。父を安心させることはできなかったが、当時彼の進学希望は医学部ではなく文学の道に替わっていたので、父に失望と悲しみを与えることなく別れることが出来て、かえって救われた思いもあったと述懐している。

夫に先立たれた母いわは、産婆をしながら子だくさんの家計を支え続けたのである。母は、みのるが中学時代から文学書を耽読しているのを見て、「雲をつかむような仕事に一生を賭けてはいけません。堅実に立派な足跡が残せるような道を選びなさい」と耳が痛くなるほど聞かされていたという。その後、みのるの決意が固いのを知って、「でもそれがお前にとって生甲斐に思えるなら、最後までやり通しなさい。あとになって少しでも悔いが残るようなことのないように……。母というものは、今あるわが子の姿より、将来のわが子に期待を賭けるものですよ」と。「母の寛大な理解と限りない愛情によって、この道草少年の歩みは決して無駄ではなく後年の私につながった」とみのるはいう。